

現代認識論とウィトゲンシュタインにおける確実性概念の相違

——「理性」に注目して——

文学研究科 三富 雄介

認識論はわれわれが何かを知っているとはどういうことか、われわれは何を知りうるかを問題にする

ウィトゲンシュタインはその生涯のうちでほとんど認識論を論じることがなかったが、晩年になって認識論の問題に取り組み、その成果は現在『確実性の問題』として知られている。ウィトゲンシュタインの認識論の一部は、現代認識論の学説とよく似ており、その意味ではウィトゲンシュタインを現代認識論の一学説として位置づけることもできる。

しかしながら、ウィトゲンシュタインの認識論は現代認識論とある点で決定的に異なっている。それは、確実な諸命題の認識的地位に対する意見の相違である。われわれが知っていることのうちには、ほとんど疑いえないような一群の諸命題がある。

「ここに一つの手がある」、「私が生まれるずっと前から大地は存在していた」等々。これらはムーアが「常識の擁護」、「外界の存在証明」で取り上げた命題であるが、認識論は当然これらの命題の認識的地位についても説明しなければならない。現代認識論であれば、これらの諸命題を内容とする信念は、認識的正当化の対象であり、知識となりうる（そしてほとんどの場合、われわれにとって確実な知識である）。それに対し、ウィトゲンシュタインはムーアが挙げたような諸命題は確実だが、それらの命題について私は知っているのではない、と考えた。

本発表では、現代認識論とウィトゲンシュタインにおけるいわゆる確実な信念についての理解の相違が何に基づくのかを見定める。発表者の見たところ、この相違は、確実性概念の理解が異なることに基づく。さらに、確実性概念の理解が異なる理由は、現代認識論とウィトゲンシュタインの間で「人間が理性的であること」の意味が異なる点にあると論ずる。現代認識論では理性とは何かを判断する積極的な能力であるのに対し、ウィトゲンシュタインでは人間の無根拠に何かを受け入れていることがすべての認識論的探究の根底にあり、無根拠に何かを受け入れていることこそが、人間が理性的であることだと考えていた、と発表者は診断する。

検討の結論として、ウィトゲンシュタインは現代認識論の一学派でもないということが導かれる。ウィトゲンシュタインは、認識論の中心的な前提について、現代認識論とは異なる見方をとっている。とはいえ、ウィトゲンシュタインと現代認識論は対立しているわけでもない。むしろ両者は重要な点ですれ違っているのであり、どちらを取るべきかは理論的な考察から直ちに導かれるわけではない。